

分 かり と 快 感 !

Z会ナビ

算数

理科

社会

お題

古墳時代の 史料を読んでみよう

(大学入試センター試験 2018年 日本史B)



次の史料は、埼玉県の稲荷山古墳から出土した鉄剣に記された文章の一部を書き下したものである。この史料に関して述べた下の文X・Yについて、内容が正しいか、誤っているかを答えなさい。

(前略)その兒、名は乎獲居の臣、世々(注1)、杖刀人の首となり(注2)、奉事し(注3)、来たり今に至る。獲加多支鹵の大王の寺(注4)、斯鬼の宮にある時、われ(注5)、天下を左治し(注6)、この百鍊の利刀(注7)を作らしめ、わが奉事の根原を記すなり。

注1) 世々：代々の大王の治世。また(前略)とした部分には、「乎獲居の臣」にいたる代々の先祖の名が記されている。

注2) 杖刀人の首となり：「杖刀人」という大王の親衛隊の中心を務め。

注3) 奉事し：大王に奉仕し。

注4) 寺：役所(朝廷)。

注5) われ：「乎獲居の臣」のこと。

注6) 左治し：統治を助け。

注7) 百鍊の利刀：何回も鍛えたよく切れる刀剣。

X 史料には、「獲加多支鹵の大王」の役所(朝廷)が「斯鬼の宮」にあるとき、「乎獲居の臣」は、大王が天下を治めることを助けたことが記されている。

Y 史料にある「獲加多支鹵の大王」は、熊本県の江田船山古墳から出土した鉄剣に記された人物と同じ人物であると考えられている。

文章の内容を読み取ろう

今回は古墳時代の史料を読んで解答する問題ということで、普通の史料問題以上に答えにくさを感じる人もいるかもしれません。しかし、この問題では、実は二つの答えのうちの一つは、歴史の知識がなくても、史料をしっかりと読むだけで答えられる問題です。言葉は難しいですが、



イラスト・瑞木匠

獲加多支鹵の大王の世の中

注をあわせて確認すれば内容は把握できます。まずは史料を見てみましょう。

史料を注とともに確認していくと、「乎獲居の臣」は代々大王の下で『杖刀人』という大王の親衛隊の中心を務め、大王に奉仕し、現在にいたる。『獲加多支鹵の大王』の役所(朝廷)が『斯鬼の宮』にあるとき、『乎獲居の臣』は、大王が天下を治めることを助けた。この何度も鍛えたよく切れる刀剣を作らせて、『乎獲居の臣』の奉仕のおおもとを記す」と書かれていることがわかります。最後に出てきた「よく切れる刀剣」はこの文章が書かれている、古墳から出土した鉄剣をさしています。ここで、史料の内容を確認しただけで、問題のXの文は「正しい」ということがわかりました。Yについては、史料には書かれていないのでまだわかりません。そこで、今度は稲荷山古墳がつくられた5世紀ごろの日本の様子を確認していきましょう。

古墳時代の漢字史料

古墳とは、支配者や有力者を埋葬した大規模な墓のことです。3世紀中ごろから出現し始め、5世紀前後には九州地方から東日本にかけて広まり、古墳も大型になり、最盛期を迎えます。古墳という独特な形の墓が各地で見られるようになったことから、このころに日本の広い地域を统一的に治める国が成立したと考えられています。その国のことを「ヤマト政権」、政権の中心人物を「大王」といいます。

それまで、日本には文字がなかったため、日本

の様子を記した文献は、中国で書かれたものしかありませんでした。しかし、5世紀ごろに朝鮮半島経由で大陸の文化が伝わり、漢字がもたらされたことで、日本国内でも漢字での記録が残されるようになりました。今回の史料の稲荷山古墳から出土した鉄剣に記された文章、Yの文にある江田船山古墳から出土した鉄剣に記された文章は、いずれも実際には漢字だけで書かれており、日本での漢字史料の最初期のものと考えられています。

稲荷山古墳の鉄剣、江田船山古墳の鉄剣にはともに「獲加多支鹵の大王」とされる文字が記されています。どちらの鉄剣も5世紀ごろに作られていることから、同時代に同じ大王が九州から関東までを支配していたことを裏付ける史料にもなっています。したがって、Yの文も「正しい」といえます。(Z会・河原井彩)



でしょう。

近年の入試では読解力も問われます。歴史の勉強とともに、文章をきちんと読み取る練習も積んでおくとい



河原井彩さん 2007年に入社。大学受験用の日本史、政治・経済の教材編集を経て、現在は中学生・高校生向けの社会科教材を担当。新潟県生まれの埼玉県育ち。